

サイエンス高等学校

東京大学名誉教授 和田 昭允

日本史はわが国のほとんどの高校で必修でない。日本人は自分の国の歴史を知らなくてよいらしい。もっとも、なまじ自虐的に教えるよりは司馬遼太郎の「坂の上の雲」でも読んで方がましというならそれも一つの見識だが、そうでもなさそう。世界から見たら全く不思議・不可解な姿勢だ。

私は横浜市が開港150年を記念して創立した横浜サイエンスフロンティア高校の常任スーパーアドバイザーの職にある。

日本で初めて「サイエンス」を冠した理系高校だ。とは言っても、偏狭な理系人間は育てない。国語と歴史、そして英語と国際交流に力を入れる全人教育を目指している。当然、日本近代史も世界史も必修だ。

私は授業はしないが毎週一回、数十人の生徒諸君とサロンのような雰囲気です。アフトヌーンティーを菓



あすへの話題

そこで「知恵」とは知識を繋げて「自分の智に

する閃きだ」「慈悲の心を持った知恵者になろう」、それには「高い視点と広い視野を持つ」といふことを願っている。

先日の話題は「噴火で2000年前に封印された古代都市ポンペイ」。自分の頭でキチンと考え、志を持って入学してきた連中だから、頭の回転はさすがに速い。古代ローマ都市の美と技を知るにつけ「今日の豊かな知識は、先人の努力の蓄積に負かされているだけだ。個人の智慧は古代人の方が勝っているかもしれない」と合点、「それを超えよう」と、また一つ希望が増えた。

サイエンスの厳密な考え方に温かいヒューマンの心を重ねた彼・彼女らが、優れた先祖たちが築いた歴史に誇りと自信を持ち、これからの科学技術日本を背負って世界に雄飛することを私は切に願っている。

平成24年11月12日

彼と己を知る

東京大学名誉教授 和田 昭允

「彼を知り己を知れば百戦して殆うからず」は先刻ご承知、戦略論の古典「孫子」不朽の箴言だ。個人から国家までが、あらゆる事にあたって心すべき教訓である。相手を「敵」と決めつけないで「彼」とするところに、その深い想いが覗える。

百戦百勝はベストではない。戦わずに相手を屈するのがよいと説き、戦争は国を全うするのが最善、国を破るのは次善だとも言う。相手を傷つけずに言うことを聞かせるのが一番良いと教える、高い視点からの処世哲学だ。だから英訳書の表題も格調高く「戦争の芸術」だ。ナポレオン、リデル・ハート、毛沢東など、古今東西の戦略家が強い影響を受けたという伝説は十分納得できる。



あすへの話題

朝敵の徳川家を全うさせた明治の新国家建設や、完膚無きまでに叩かれた後、経済大國として全うした日本はその成功例だ。

一方、未だ混沌の淵にある中東を見ると、一代の皮肉屋バーナード・ショアの痛烈なアイロニー「歴史から学べることは『われわれが歴史からは何も学んでいない』ということだけだ」には実感がある。

われわれの「彼」は森羅万象、つまり宇宙、地球、環境、社会、職場、家族……であり、「己」は学術、思想と価値観、そして膨大な知識集積から価値を創造する叡哲だ。これらを弁えれば、冒頭の言に続く「彼を知らずして己を知れば一勝一負し、彼を知らず己を知らざれば、戦う毎に必ず殆うし」の羽目には陥らない。

国家をはじめ物事を誤らないためには、まず彼と己をよく見極め、知る。その上で知情意を尽くして有終の真善美を飾る努力をすれば、悔いは残らない。

平成24年11月19日

森羅万象とサイエンス

東京大学名誉教授 和田 昭允

森羅万象とは全宇宙にある一切のモノとコトだ。われわれの想いの対象である。それは銀河群、太陽系、地球、生命、人間、さらに細胞、分子、原子、素粒子までのモノが、システムの中心にシステムが入る形で、何層もの入れ子になってコトを起こしている。幽玄な時・空間の、巨視と微視双方への壮大な拡がりである。

その重層構造では、下層のモノ・コトが関係し合って上層を演出する。サイエンスはこれを「部分の相互作用で全体の構造と性質が現れる」と考える。だから科学者は森羅万象のこれぞと思うシステムを切り出し、正体へ構造・性質・働きを知らうと成分分析やメカニズム解析をするのだ。その森羅万象の、そもそもの始まりは？



あすへの話題

もの本によると、17世紀中頃に英国国教会の大主教とケンブリッジ大学の副総長が聖書の記述から、天地は西暦紀元前4004年10月18日から

24日にかけて創造された、と判断したとある。優れた頭脳の方々も、頼るデータと解釈によっては大きく間違ってしまうという教訓だ。幸い今日、人類には科学計測と数理解析という精強無比の方法論があり、加えてスーパーコンピュータの豪腕が味方だ。

おかげで宇宙の年齢は大爆発による誕生から約137億年と解った。というところで、誕生の産声みたいに発した光や電波は137億光年にあたる距離の旅を終えて、ようやく生まれわたる姿を私たちに見せてくれている。ちなみに地球から太陽までは8.3光分、地球一周はほんの0.13光秒だ。宇宙はいまも膨張を続けている。だから誕生時の光がやっと地球に辿り着いた今現在、宇宙の果ては遙か465億光年の彼方に行ってしまうのだぞである。